

平成 22年 5月27日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18320047

研究課題名（和文） ローマの政治・思想・修辞学が古典古代の文学に及ぼした影響

研究課題名（英文） The Influences of Roman Politics, Philosophy and Rhetoric upon the Roman Literature

研究代表者

逸身 喜一郎（ITSUMI KIICHIRO）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：40107420

研究成果の概要（和文）：

日本におけるラテン文学研究の弱点のひとつは、その内容が物語（神話）の叙述を軸に据えておらず、あるいは詩人の直截な感情とも一線を画している一連の韻文作品があまり顧みられることにある。これらの作品の理解には、同時代の思想（そこには自然科学的分野も含む）、社会風潮ないし政治状況の影響、さらに当時の教育の基本であった修辞学、こうしたことへの理解が不可欠である。しかし研究はあくまで個々の作品の個別的な理解に基づいて精査されなくてはならない。研究の結果えられた知見は多々あるが、2点だけ例示するならば、教訓詩は狭義の叙事詩と不可分であること、共和政から帝政への移行期のプロソーポグラフィ（精密な人物史）が不可欠であることになる。

研究成果の概要（英文）：

Studies of Roman literature in Japan tend to be concentrated on two genres: epics based on mythical story and elegies from personal sentiments. This is a defect. Roman literature is under the influences of politics, philosophy (including natural sciences), and rhetoric. The relation between literature and these must be examined on each work in detail. Two important knowledges are gained among others: didactic poems cannot be isolated from epics in narrower sense, and prosopography is indispensable for the understanding the poems from the Republican age to the Augustan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2007年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総計	14,700,000	4,410,000	19,110,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：①西洋古典 ②ラテン文学 ③ローマ史 ④ヘレニズム思想 ⑤修辞学

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本におけるラテン文学研究は、ギリシャ文学に比べて明治このかたややないがしろにされてきたきらいがあったけれども、近年その水準は著しく進歩した。しかしながら研究は特定の作品に集中されがちである。つまり物語（神話）が語られている作品（たとえばウェルギリウス『アエネーイス』）ないし作者の心理が明瞭に表現されている作品（たとえばプロペルティウス）は研究者の関心を大いに集めており、しばしば成果が公表されている（この20年間の『西洋古典学研究』参照）。それに対して韻文、具体的にはヘクサメトロスにのせて書かれていながら、その内容が物語（神話）の叙述を軸に据えておらず詩人の直截な感情とも一線を画している一連の作品（多くは「教訓詩」「風刺詩」「書簡詩」などと総称されるが、ジャンル区分すら再考の余地がある）はあまり顧みられることがなかった。その理由はいろいろ考えられるけれども第一にそれらを読解することの難しさがあげられる。端的に言えば叙述の論理（言い換えれば「筋」）を追うことすらしばしば不明である。作者の姿勢についても、それが韜晦であるのかそれとも本心であるのかすら把握しがたいこと少なくない。

(2) しかしそれとともにこれらの作品の理解の難しさには、同時代の（広義の）思想との関連、ならびに（たとえば社会秩序や経済の繁栄の実体といった）社会風潮ないし政治状況の影響を測定することなしにはこれらの作品解釈が成り立たないことが大きく関与している。しかもここで思想という言葉であらわしている内容は、人生論的側面にとどまるものではない。今日の眼からすれば自然科学的（ないし占星術のような擬似科学的）な分野も当時の常識からすれば「哲学」の研究対象であり、しかも同時に詩の対象になりうる。さらにローマにおける「哲学」と「政治」の緊密な関係は指摘するまでもない。つまり「教訓詩」「風刺詩」「書簡詩」などは人間の営み全般と連関しており、文芸作品の独立を重視する近年の批評とは相容れない。あくまでひとつの立場を承知でまとめるならば、ローマ人にとって正しい生き方の考察は、政治への関与はいうまでもなく、宇宙生成論的思索とも影響しあう。そしてそのような人間像を描いている作品の一例がプルタルコス『対比列伝』であるが、この作品こそ様々な分野の研究者の協力が必要なテキストである。

2. 研究の目的

(1) 西洋古典学はいわゆる「哲・史・文」に区分されることなく、それらを統合して「ギ

リシャ・ローマ時代」を把握すべきものである。しかし「哲・史・文」それぞれの学問分野の歴史は長く、関心の対象や、研究方法のありようが互いに異なりがちである。東京大学大学院人文社会系研究科の層の厚さを有効に活用して、「哲・史・文」各分野の研究者を参集し、各研究者が互いの違いを自覚した上であらためて相互理解を深めることに努力する。

(2) 文学作品（本研究ではラテン語韻文の総体として定義する）は、哲学・弁論術・政治と密接に関連している。しかしその関わりを精査するためには、あくまで個々の作品に基づいて考えることから始めなくてはならない。様々な分野の専門家の、幅広い世代の知識を糾合してインターディシプリナリーに、難関であるテキスト群に多角的に挑んでみる。さらにまたローマの文学の特殊性を理解するためには、ギリシャの伝統をも精査する必要がある。これは単に文芸ジャンルの約束を理解するにとどまらず、社会のありようの差異についても目を向けなくてはならないであろう。

3. 研究の方法

(1) この研究をはじめめる以前に開催した、「多分野交流演習（ギリシャ・ローマ研究の方法）」（東京大学・大学院人文社会系研究科）のメンバーを核にすえ、いわゆる「哲・史・文」をおおう研究者からなる研究組織を作る。それぞれの研究者のこれまでの研究成果を総括するシンポジウムを開催する。

(2) それぞれの研究者が知見を発表する場（研究会）を定期的に開催する。

(3) 重要かつ難解な書物については、読書会を催し、微細にわたる議論をする。とりわけ R. Syme, *The Roman Revolution* (Oxford, 1939) については一字一句、ゆるがせにしないで読む。そしてキケローやプルタルコスのみならず、アッピアーノスやディオーンといった、ややもすると読まれることの少ない歴史書にも丹念にあたる。

(4) 外国の研究者、とりわけ英国ならびにドイツの研究者を中心とするセミナーを開催する。同様に外国に出張し、直接に議論し、助言を仰ぐ。とりわけオクスフォード・ケンブリッジをはじめとする英国の研究者からは、従来からも多くの裨益をうけてきている。その理由として研究代表者（逸身）のみならず連携研究者の多く（例 桜井・橋場・納富・神崎・佐野）が、英国滞在経験が長く、その後もたびたび訪英しているので、多くの知見があることがあげられよう。

(5) 研究成果を書物の形で刊行して成果を問い、さらなる研究の礎石とする。

4. 研究成果

(1) 以下の研究会を開催した。

① シンポジウム：平成 18 年 7 月 14 日。
② 小研究会（カッコ内は発表者名）：平成 19 年 6 月 15 日（吉田俊一郎）、11 月 9 日（近藤智彦）平成 20 年 3 月 14 日（小池和子）、9 月 19 日（兼利琢也）、9 月 22 日（Douglas Cains（英国エディンバラ大学））、平成 21 年 4 月 10 日（Malcolm Davies（英国オックスフォード大学））、5 月 22 日（大芝芳弘）、6 月 19 日（近藤智彦）。

③ R. Syme, *The Roman Revolution* に関する研究会：平成 18 年度（通算 12 回：5/12、6/9、6/30、7/18、10/6、10/27、11/17、12/22、1/12、2/2、2/16、3/16）平成 19 年度（通算 13 回：4/20、5/11、6/22、7/13、8/29、10/5、11/2、11/30、12/21、1/11、2/8、2/29、3/26）、平成 20 年度（通算 15 回：4/18、5/9、5/30、6/20、7/11、8/1、9/12、10/3、10/24、11/14、12/5、2009/1/16、2/6、2/20、3/13）、平成 21 年度（通算 15 回：4/24、5/15、6/12、7/3、7/31、8/14、9/11、10/2、10/23、11/13、12/25、2009/1/15、2/5、2/24、3/17）。

(2) 教訓詩とは誤解を生み出す名称である。古代には狭義の叙事詩（すなわち神話を基にした物語の筋がある）も、いわゆる教訓詩とともにエポスであって、両者を区別していなかった。すなわち教訓詩というジャンル概念がなかったのである。狭義の叙事詩と教訓詩は、内容的にも細部をみればたがいに入り組んでいる。しかしもし取り扱っている対象に注目して、あえて教訓詩をとりだすならば、それらは「学問詩」といったほうがまだしも適切である。また、教訓詩（学問詩）は、散文で書かれた著作を韻文におきかえたものである、とする通念にも、疑いをはさんでみる必要がある。

(3) ローマ共和政から帝政初期にかけての時期は研究しつくされたようにみえる歴史分野であるが、少なくとも日本の歴史学の見地からみれば、まだまだ十分に論述されていない。とりわけ個々の人物の動き方・考え方を丹念に追ったプロソポグラフィの手法を、今一度、精査する必要がある。同時に一次資料そのものが持つ思想的バイアスにももっと注目すべきである。アウグストゥス体制を作り出した「勝者」は、「敗者」である旧体制の支持者（例えばキケロー）を悪人扱いして排除するのではなく、思想的にも自分たちの陣営に取り込んで挙国態勢を作っているということに留意すべきであろう。一人支配体制（帝政）は共和政の理念すら、換骨奪胎して取り入れるのである。

(4) ウェルギリウスやホラーティウスはアウグストゥス政権を思想的にも支持する作品を作った。しかしそれはたんにアウグストゥスやマエケナーヌスをよしとするだけで

はなく、彼らが作った新しい社会の道徳的・社会階層的基盤をそもそも受け入れ、補強したからである。これを単に政権に対する迎合とみるのは短絡であることはいうまでもないが、詩人の内面の自由に重きをおくあまり、政治との距離を過大評価してはならない。そしてそのことは彼らの作品の価値をなんらおとしめるものではない。

(5) セネカの悲劇と哲学的著作にあっても、たんに哲学を悲劇に応用しただけではない。語句の類似性はいうまでもないが、さらには思考論理にすら類似性がみられる。

(6) 帝政期になると弁論術は政治の場での有効性を失い、教育手段として自己目的化をする。政治と文学ないし弁論術と文学の関係についても、もっと細かに年代をわけて_____ウェルギリウス・ホラーティウスと、オウィディウスあるいはルーカーヌスとを、さらにはスタティウスも視野に入れて_____考察すべきである。修辞学のみならずローマ史の手引きとしても愛読されたワレリウス・マクシムスにも、もっと注意が払われるべきであろう。

(7) 大芝芳弘・小池登編『西洋古典学の明日へ』（書誌については、下記「5. 主な発表論文等」の〔図書〕の項を参照）は、10名の連携研究者を中心にした全 23 篇の論文から構成されている。その中には研究会に出席した多数の若手研究者の論文を含んでいる。逸身の退職記念論文集という形態になってはいるものの、論文の中には今回の研究で得られた知見を扱っているものが少なくなく、本研究の総括といった側面もある。本研究と関わっている論文の詳細については下記に列挙した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）

① 逸身喜一郎 「教訓詩人個々人の系譜的自己規定、ないしジャンル意識」『西洋古典学研究』56、2008 年、pp.1-13。査読あり。

〔学会発表〕（計 21 件）

① 逸身喜一郎 「教訓詩人個々人の系譜的自己規定、ないしジャンル意識」日本西洋古典学会第 58 回大会、2007 年 6 月 3 日、青山学院大学。

〔図書〕（計 7 件）

①（共著）Kiichiro Itsumi: 'What's in a Line? Papyrus Formats and Hephaestionic Formulae' in: *Hesperos: Studies in Ancient Greek Poetry Presented to M. L. West on his Seventieth Birthday*; edited by P. J.

Finglass, C. Collard, and N. J. Richardson, 2007, Oxford University Press, pp. 306-325.

② Kiichiro Itsumi: Pindaric Metre: The 'Other Half', 2009, Oxford University Press pp. xx + 464

③ 大芝芳弘・小池登編『西洋古典学の明日へ——逸身喜一郎教授退職記念論文集——』2010年3月、知泉書館、Pp. xi + 415。

この図書の中でとりわけ本研究の成果が直接にあらわれているものを挙げる。

・佐野好則「冥界のヘーラクレス」 pp. 31-50.

・小池登「称賛の利得」 pp. 51-70.

・小池和子「キケローとコルフィキニウス」 pp. 117-130.

・大芝芳弘「O fons Bandusiae」 pp. 131-150.

・吉田俊一郎「ウェレイユス・パテルクルスとフレリウス・マクシムスの典拠の利用と文体について」 pp. 167-176.

・納富信留「アリストファネスのプロディオス」 pp. 191-200.

・近藤智彦「ストア派の「運命」概念の起源を辿る」 pp. 215-233.

・神崎繁「道徳的発達と言語行為の相関」 pp. 235-251.

・兼利琢也「セネカにおける自由の行為の修辞」 pp. 253-267.

・桜井万里子「メネステウスとメネディオス」 pp. 281-291.

・島田誠「世紀競技祭 ludi saeculares とアウグストゥス」 pp. 333-344.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

逸身喜一郎 (ITSUMI, KIICHIRO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：40107420

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

片山 英男 (KATAYAMA HIDEO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：70114436

天野 正幸 (AMANO MASAYUKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：40107173

櫻井 万里子 (SAKURAI MARIKO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：90011329

橋場 弦 (HASHIBA YUZURU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：10212135

小池 和子 (KOIKE WAKO)

慶應義塾大学・言語文化研究所・准教授

研究者番号：50313185

神崎 繁 (KANZAKI SHIGERU)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20153025

大芝 芳弘 (OSHIBA YOSHIHIRO)

首都大学東京・都市教養学部・教授

研究者番号：70185247

島田 誠 (SHIMADA MAKOTO)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：90192608

納富 信留 (NOTOMI NOBURU)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：50294848

佐野 好則 (SANO YOSHINORI)

国際基督教大学・教養学部・上級准教授

研究者番号：50295458

近藤 智彦 (KONDO TOMOHIKO)

秋田大学・教育文化学部・講師

研究者番号：30422380

小池 登 (KOIKE NOBORU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：10507809